

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（一五）

菌部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二（明治書院、二〇〇四年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

- 現代語訳（一）～（三） 応永二三年（一四一六）分『米沢史学』三〇号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二二号（二〇一四～一五年）
- 現代語訳（四）～（六） 応永二四年（一四一七）分『米沢史学』三一号・『紀要』五一号・『生活文化研究所報告』四三三号（二〇一五～一六年）
- 現代語訳（七）～（九） 応永二五年（一四一八）分『米沢史学』三二号・『紀要』五二号・『生活文化研究所報告』四四四号（二〇一六～一七年）
- 現代語訳（一〇）～（一二） 応永二六年（一四一九）分『米沢史学』三三三号・『紀要』五三三号・『生活文化研究所報告』四四五号（二〇一七～一八年）

○現代語訳（一三） 応永二七年一月一日から四月二九日まで。『米沢史学』三四号、二〇一八年

○現代語訳（一四） 応永二七年五月一日から八月三〇日まで。『紀要』五四号、二〇一八年

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二七年九月一日から二月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

- 横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）
- 位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）
- 小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇一〇～二〇一四年）
- 村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三、二〇一四年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中

近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

松蘭斎『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

（応永二十七年）九月一日、曇りで、夕方に小雨が降った。「良い兆し
で、たいへん幸せだ」と予祝した。いつものように月初めのお祝い
をした。

法安寺へ東御方・廊御方・田向三位・重有朝臣が行った。法華経
第五巻が終わったそうだ。

御香宮恒例の祭礼が行われた。御神輿の御旅所巡行を拝見した。
その後、お忍びで相撲を見物した。相撲は数十番とられて、とても
面白かった。田向三位以下行豊朝臣らをお供に連れて行った。

二日、晴。法安寺へ行った。東御方・廊御方・塔頭御寮恵芳・田向三
位・重有・長資ら朝臣・寿蔵主・二人の局女らも来た。惣得庵の面々
もいつも通り来ていた。

今日の説法は、法華経寿量品である。その後、阿弥陀経について
も説法がなされた。これは、信者の希望によるものだそうだ。念仏
に関するお経の文章はすばらしい。

法安寺からまたしてもお酒が差し入れられた。仏法を聞いている
時にお酒を飲むのは罪業である。

三日、晴。今出川家へ鯉や酒樽などを送った。先日、秘曲の両流泉の
伝授証明書を書いて下さったので、特にそのお礼の気持ちを表した
ものである。本枕は実際に秘曲伝授の際にお渡しするつもりだ。今

出川家からは、「思いがけないことでいろいろとありがたうお礼申
します。特に鯉の姿が立派で驚きました」と言ってこられた。

法安寺へ行った。東御方・廊御方・田向三位・重有朝臣・寿蔵主・
二人の局女らも行った。惣得庵主と山田香雲庵主もいつもの通り来
ていた。

惣得庵主は秘かに酒樽を一つ持参していた。説法の間、庵主はこ
の酒を皆に飲ませた。思いがけないことで、面々はただ面白かった。

長資朝臣は朝廷の小番に出仕していた。

四日、晴。法安寺へ行った。東御方・廊御方・重有朝臣・慶寿丸・局
女らも行った。惣得庵主と山田香雲庵主もいつもの通り来ていた。

以前と同じく、阿弥陀経についても説法があった。

長資朝臣が帰ってきて、世間話をしてくれた。来月、称光天皇陛
下が嵯峨に行幸なさることがほぼ決まったそうだ。お供する公卿は
五人、殿上人は十人だという。その後、上皇の御所へ行幸するらし
い。

五日、晴。法安寺へ東御方と廊御方が出かけた。重有朝臣が京へ出か
けた。

聞くところによると、室町殿の風邪は依然として重態だそうだ。
八朔憑贈答のお返しを、藤原能子典侍殿・勤修寺経興檢非違使別
当・葉室宗豊朝臣らに送った。

六日、晴。法安寺へ東御方・廊御方・玄経らが行った。阿弥陀経説法
の最終日だそうだ。

足利義持は傷風か

重有朝臣が京から帰ってきて言うことには、室町殿の風邪は重態

だそうだ。医師の高間は傷風（※）と診断しているらしい。ただし来月には称光天皇陛下の行幸が予定されている。この病気のため、室町殿の行幸への参列は延期した方がよろしいのではと進言しているそうだ。

大光明寺、山田宮の下刈りに反対する

さて大光明寺が都主や直歳（※）を使者として寄こして言うことには、山田宮の山木の下刈りのことに関する伏見宮様のご決定により面目を失ったとして、長老が退任すると仰つてますとのことだった。

この事について私は何も知らなかったので、宮家の事務担当者に尋ねたところ、九日は山田宮猿楽なので、その灯り取りの燃料にするため、山木の下刈りをすると寺家に連絡したら、問題ないとの返事だった。それで山田宮の社人が下刈りをしたところ、今度はまた大光明寺が下刈りに反対してきた。一事両様の対応がおかしいので、田向三位が大光明寺に行つて尋ねた。そうしたら、以前は間違つて問題ないと返答してしまつたが、本来は許されない行為である（※）。しかし神事のためであるのなら、あえて反対するのは難しいと返答してきたそうだ。

この件は、前任職の徳祥和尚の時、取り決めがなされている。その取り決めは、山田宮社家の答申書類や徳祥が決めた規則の書類などに明らかである。以前のこの取り決めを背いて下刈りに反対するのは、とても乱暴な話である。

結局、このことで長老が任職を退任するのはもったいない話だと、田向三位を通して二人の使者僧を説得した。しかし都主はとても大

きな声を出して、それは無理なことだと叫んでいる。もしかしたら、都主はひどく酔つ払っているのかもしれない。とてもよろしくない事だ。とにかく、どうであつても退任してはいけないと返答しておいた。

※傷風：未詳。破傷風のことか。

※都主（つうす）・直歳（しつすい）：いずれも禅宗寺院僧の役職名。

※「本来は許されない行為である」：原文にはこの記述はないが、前

後の文脈から補った。

七日、晴。大光明寺へ小川禅啓を遣わして、「この件で長老が引退す

ることは軽はずみな出処進退なのでよろしくない」と警告させた。

それに対する長老の返事は「大光明寺が経済的に窮乏しているので、

引退したいのです。以前から引退する意思が内々にありました。山

田宮の下刈りの件で引退するとは一言も申し上げておりません」と

いうことだった。

どうも使者の都主が腹立ちのあまり、自分勝手にこの件で長老が

引退すると言いつつらしい。よろしくない事である。

さて室町殿の御風邪は、以前と病状は変わらないそうだ。食事も

できず、いたわしい病状のようだ。大勢の人が心配して室町殿の御

所に集まっていると聞く。驚いた次第である。

父母恩重經

法安寺へ東御方・田向三位・重有朝臣・長資朝臣が行つた。法華

經第六卷の説法が終わつたそうだ。また父母恩重經についても説法

があつたという。

八日、晴。室町殿へ「御風邪をひいていらつしやるそうで驚きました」

と田向三位を使者として病氣見舞を申し入れた。夕方に田向三位は帰ってきた。田向三位が高倉永藤朝臣を通してお見舞いを申し入れたところ、ありがとうございましたと御返事があったそうだ。大勢の人が室町殿の御所へ集まっていた。御病状はとてもひどい状況だそうだ。

明日、伊勢神宮へ室町殿の代理として三十三人の近習の人々が参詣に行くそうだ。また大きな病氣平癒の法会が明後日から行われるという。国家の一大事として、とても驚いている。

法安寺へ行った。東御方・廊御方・重有朝臣も行った。法華経第七卷の常不軽品の説法があった。その後の父母恩重経の説法も、とてもすばらしかった。聴講者は少なかった。惣得庵主はいつも通り来ていた。

今夜はいつものように菊に真綿を着せた。そして御香宮御旅所にお参りした。

九日、晴。「重陽の良い時節で、とても幸せだ」と予祝した。いつものように御節供のお祝いをした。椎野寺主がやってきた。冷泉正永も来た。御香宮祭礼を見物するため、田向家に行った。私の息子・娘、東御方・廊御方・二条殿・今参を連れて行った。

田向家で月次の連歌会を行う

ところで毎月恒例の連歌会であるが、先月の田向三位の当番幹事役が延期になったままである。田向家で連歌会を行ったことがないので、今日の祭礼見物のついでに、田向三位が当番幹事として連歌会の用意をすることを、兼ねてから約束していた。それで一座の連歌会を始めた。

椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・冷泉正永・即成院善基・行光・小川禅啓・浄金剛院の僧である覚雲らが連歌に参加した。まず一献の酒宴をした。

御香宮祭礼の当番は三木善康

その時、祭礼の行列がようやく渡ってきた。山笠や囃子物などが来た。舟津のお囃子が来た。三木家のお囃子は触穢のため、急に参加となつた。御祭の当番は三木与一善康であった。萌葱色の糸で威した腹巻を着た練り歩き行列の童、三木家の雑役夫一人、それに薄紫の狩衣を着て鹿毛の馬に乗った奉公人六人らが、三木善康に付き従っていた。それに衣冠を着た祢宜、巫女などがいつも通り、行列に加わって来た。風流笠なども少しきれいに飾ってあった。大勢の見物人が群れ集まっていた。

祭の行列が過ぎ去ってから、一献の酒宴をした。その次に連歌を詠んだ。夜に入って連歌百韻を詠み終わった。そしてまた一献の酒宴をした。酒に酔ったので、座を立てて宮家に帰った。法安寺の説法は、御香宮のお祭りのため、延期されたそうだ。

さて夏の修行期間に雅楽や和歌の百日稽古をいつものように行った。それで詠んだ和歌の短冊を今出川公富中納言へ献じた。良い先例に基づき、毎年、和歌を送っているのである。

法安寺猿楽

十日、晴。獅子舞が来た。いつものように扇や褒美の品などを与えた。法安寺で猿楽がある。法安寺から見物の誘いがあったので、行ってみた。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・冷泉正永を連れて行った。寿蔵主・具侍者・正真小僧・稚児の聖乗と梵

祐らも来ていた。

ところで説法の学問僧はまだ私と対面したことがなかったので、会いたいのことだった。対面なさったらいかでしようかと法安寺の住職が頻りに勧めるので、短時間ではあるが会ってみた。そしてすぐに座を立った。その後、一献の酒宴があった。

さて楽頭が言うことには、猿楽を雇ったが、急に状況が変わって来られなくなったそうだ。そのため、ただ三人の演者しかいないという。人数が足りないので、猿楽を演じきるのは難しい。ただ翁面の式三番だけをやりまうと行って来た。自分勝手の至りであり、とてもよろしくない事だ。厳しく叱責したら、三人だけですうがなんと猿楽を演じますと楽頭は言った。それですぐに棧敷に入ったら、猿楽が始まった。

役者が足りないとはいいながらも、問題のない演技だった。それどころか、感情がこもった演技であり、とても面白かった。また一献の酒宴を法安寺が用意してくれた。酒宴の準備を何度もしてくれるが、これはどうでもいいことである。三番目の演能の時、褒美の太刀を与えた。見物席にいた学問僧が、団扇を投げ与えた。後で追加のご褒美を与えると三番の演目が終わってから、宮家に帰った。

山田宮猿楽

夜にまた山田宮の猿楽を見に行った。まず指月庵に行き、しばらく待った。待っている間、即興の連歌をした。発句は冷泉正永が詠み出し、それを懐紙に書き止めた。すぐに懐紙一折り分が終わった。

その後、見物席に入った。指月庵門前の川岸の上に見物席が拵え

であった。東御方・二条殿・今参・塔頭御寮惠芳・玄経・女官らも見物席に来た。演能三番が終わってから帰った。

法安寺の説法は、今日も延期されたそうだ。

十一日、晴れていたが、夜に雨が降った。朝早く、学問僧の月庭が来た。昨日対面して下さったお礼だという。法安寺の住職も一緒に来た。すぐに対面した。椎野寺主も一緒に対面した。そしてすぐに出ていった。

その後、説法の聴講に法安寺へ出かけた。椎野寺主・田向三位・重有・長資ら朝臣、そして宮家の女性たち、東御方・廊御方・二条殿・芝殿・今参・塔頭御寮惠芳・玄経・二人の局女・女官らも来た。いつものように山田香雲庵主も来ていた。惣得庵主は来ていなかった。数時間の説法が終わって、夕方、宮家へ帰った。学問僧はお盆一つ分のお茶菓子を献上してくれた。こちらから差し入れをするべく、きところ、先立ってのご芳志に痛み入るものである。

医師高間・陰陽師定棟は狐憑き

さて室町殿の御風邪は、相変わらずの容体らしい。それどころか日を追って、身体が利かなくなっているようだ。医師の高間が狐を付けていることが明らかになったので、管領の畠山（※）が逮捕して、家人である薬師寺にその身柄を預けたそうだ。その際、狐三匹も捕まえて、縛りつけて置いたそうだ。

陰陽師の定棟も同じく狐憑きであることが明らかになったので、細川義之讃岐守が逮捕したそうだ。不思議なことである。国家の御祈禱はすべてこの一大事に集中している。驚くべき事である。

さて御香宮や権現などの猿楽が今夜行われる。しかし猿楽の役者

がない。よろしくない事なので、楽頭を譴責した。それで今夜の猿楽は延期となった。冷泉正永が帰っていった。

※「管領の畠山」：この時の管領は細川満元である。貞成の勘違い。

宝楼閣経の説法

十二日、雨が降った。法安寺の学問僧を田向家に招いて、宝楼閣経について説法させたそうだ。

その後、法安寺へ行った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣も行った。宮家の女性たち、廊御方・上臈・芝殿・あや・新中女性・玄経・二人の局女らも来た。惣得庵主・山田香雲庵主もいつものように来ていた。父母恩重経の説法が終わった。

十三日、晴。豊原郷秋が来た。春以来、お腹の病気のせいで宮家には来ていなかった。既に説法の聴講に行く時間だったので、少しだけ対面した。音楽会はしなかった。それですぐに出ていった。

室町殿の容体は以前と同じだそうだ。室町殿の奥方である日野榮子殿が一昨日から北野天満宮にお籠もりして、数多くの御祈祷をしているそうだ。五檀法もおこなったらしい。このように郷秋は話していた。

法安寺へ行った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・寿蔵主・慶寿丸らも行った。宮家の女性たち、東御方・廊御方・局女・女官らも行った。いつものように惣得庵主と山田香雲庵主も来ていた。

今夜は名月なので、少し和歌を詠んだ。和歌を詠んだのは、私・椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・正永らである。それから、それぞれの和歌を披露した。いつものようにお見もした。十四日、晴れていたが、時雨が降った。夕方には晴れた。法安寺へ行

った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣、宮家の女性たち、東御方・廊御方も一緒に行った。法華経第七巻の説法が終わった。帰り道に光・台寺へ行き、いつものように風呂に入った。

狐憑き事件の詳細

室町殿は少し元気になったそうだ。高間は侍所に引き渡され、いろいろと尋問されたそうだ。高間の自供により、狐憑きの同類八人が昨日逮捕された。彼らは医師・陰陽師・験力のある僧たちだとい

高階俊経も狐憑き

このうち、五撰家の二条持基左大将（※）に仕えている家司の高階俊経朝臣は医道を学び狐を使っているという噂が日頃からあった。それで俊経も逮捕されたようだ。

俊経朝臣の娘である尼僧が惣得庵に居る。またその尼の姉妹が世尊寺行豊朝臣に嫁いでいる。この娘たちが右往左往と戸惑いながら没落していくのは、かわいそうなことだ。行豊朝臣は、この嫁をすぐに離別したそうだ。

この他、目医者である松井大進・宗福寺長老・清水堂の堂主らも逮捕されたそうだ。彼ら以外に犯人の名は聞いていない。

室町殿へ昼も夜もお仕えしている人々は、烏丸豊光卿・日野有光卿・裏松義資卿・冷泉永藤朝臣・清原常宗らである。

広橋兼宣や慈光寺持経らは朝廷や上皇御所にお仕えしているの

で、室町御所へは来なくてよいと言われているそうだ。広橋自身は以前から室町殿に譴責されているので、もとより室町御所へは行くことができない。

今夜、田向三位が保安寺の学問僧へ、在家信者の法門との結縁を表す系図を作成してもらいに行った。小川禅啓・三木善国・浅野康知も、同じく系図を作成してもらいに行った。その他、尼僧たちも同じように系図を受けに行ったそうだ。

※二条持基左大将：『公卿補任』によると、応永二十七年正月に持基は左大将を辞めている。

十五日、雨が降った。法安寺へ行った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣、宮家の女性たち、東御方・廊御方・二条殿・玄経・二人の局女らも行った。惣得庵主・山田香雲庵主もいつものように来ていた。法華経普門品の説法（※）は素晴らしかった。とてもありがたく感じた。

※「説法」：原文では「詮法」とあるが、説法の誤記であろう。

十六日、晴。いつものように身を浄めた。法安寺へ行った。椎野寺主・田向三位・重有・長資ら朝臣、宮家の女性たち、東御方・廊御方・上臈・芝殿・庭田家の女性たち・塔頭御寮惠芳・玄経・二人の局女・女官らも行った。惣得庵主・山田香雲庵主もいつものように来ていた。

ところで学問僧にちよとしたお布施として、衣服一重の代わりにとして銭三貫文を渡した。仏法を聞き、仏道と縁を結ぶことができたとお礼の気持ちを表したままである。法安寺住職を通して渡した。とても恐れ多くありがたいことですよと言っていた。聴講している面々も、あるいは軽食、あるいはお布施の品などを捧げたそうだ。

聞くところによると、室町殿の病状が少し軽くなったそうだ。めでたいことである。

十七日、雨が降った。法安寺へ行った。椎野寺主・田向三位・重有・長資ら朝臣、宮家の女性たち、東御方・廊御方・芝殿・玄経・女官・惣得庵主・山田香雲庵御寮真幸らも行った。法華経普門品の説法が終わった。

十八日、晴。法安寺へ行った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・寿蔵主も行った。宮家の女性たち、東御方・廊御方・玄経・二人の局女・二人の女官・惣得庵主・山田香雲庵御寮真幸らも行った。用健もいらつしゃって聴講なさった。用健はこのところ休暇をとって、指月庵に滞在しているそうだ。

十九日、晴。法安寺へ聴講に行った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・正真も行った。宮家の女性たち、東御方・廊御方・宝珠庵主・玄経・局女・惣得庵主・山田香雲庵御寮真幸らも行った。

説法は明後日が最終日である。ところが僧たちは聴講に来ていない。即成院主一人だけが来ていた。この一兩日、僧たちが来ていないのは、どうしてだろうか。

地藏経の説法

二十日、晴。御香宮へお参りした。帰り道に、法安寺へ行った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・寿蔵主・正真も行った。宮家の女性たち、東御方・廊御方・二条局・芝殿・玄経・局女も行き、いつものように惣得庵主や山田香雲庵御寮真幸も来ていた。夜にまた地藏経が説かれた。そのために宮家の女性たちや男どもはまた法安寺へ行った。

さて室町殿のご病気が回復してきてめでたいというお見舞いを、清原常宗から室町殿へお伝えするように命じた。

後小松上皇、御所持の首を刎ねさせる

ところで聞くところによると、上皇御所の侍がこの十七日に賀茂川の六条河原で首を刎ねられたそうだ。この御所持は、後小松上皇様のご機嫌うるわしく、傍若無人の振る舞いであった。ところが御所の女官と密通して妊娠させてしまった。そのことが明らかになったので、二人揃って御所から追い出されたそうだ。それはこの一、二年前のことらしい。

この御所持は自宅で謹慎しており、上皇様からお許しをいただくよう、あの手この手で申し入れていたが、お許しがなかった。そこで、この十六日に上皇御所へ押しかけて、直接、上皇様へお許しを願ったそうだ。「ただいまお許しがなければ、生きていてもしかたがない」と激しく申し入れたので、門番をしていた細川義之讚岐守の家人に命じて逮捕させたそうだ。そして広橋を通して、室町殿の方で処刑してほしいと上皇様から連絡があつたという。

ところが天皇家のご処置として死刑を行うのはいかがなものかと思われたので、流罪にしてはいかがでしょうかと室町殿がお返事なさったそうだ。それでもなお、ただ処刑してほしいと重ねて上皇様が仰るので、その上はいたしかたない、ご命令通りに致しましょうと室町殿が返答されたそうだ。それで、十七日に首をお刎ねになった。天皇家のご命令としては論外の処置だと噂になっているらしい。

月庭の法華経談義最終日

二十一日、晴。世尊寺行豊朝臣が来て世間話をして。すぐに帰っていった。

法安寺へ行った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・寿

藏主・正真、宮家の女性たち、東御方・廊御方・二条殿・芝殿・庭田家の女性たち・塔頭御寮惠芳・玄経・二人の局女・女官・惣得庵主・真幸らも行った。今日は説法の最終日である。聴衆が群参していた。いつものように僧たちも大勢着座していた。

私はまず法安寺の一室で学問僧と対面した。この説法期間中、なにも障害なく無事に最終日を迎えることができてめでたいとお祝いした。

行基菩薩直筆の俱舍論

さて、「観音経二句の韻文について、最も秘密の説をお授けしましょう」と学問僧が内々に言うので、早速、秘密伝授の証明書を書くための紙を一枚、差しあげた。また感謝の意を表すために、行基菩薩直筆の俱舍論第二三巻を学問僧にお渡しした。これは代々大事に伝えてきたお経である。他に都合の良い物がなかったので、このお経をお布施として差しあげた。学問僧は大変うれいすと言っていた。

その後、説法が始まった。法華経第八巻の講義が終わった。そして楞嚴呪一卷を読んだ。聴衆や僧達も声を合わせて読んだ。供養のための楞嚴呪読経が終わり、各々が座を立った。聴衆も三々五々退出していった。

貞成は三十九回聴講した

数日間何ごともなく無事に説法が終わったのは、めでたいことである。私は法華経の説法をこれまで聞いたことがなかったので、これで仏道に入る良い縁を結ぶことができた。差し障りがあつて、度々聴講を怠った。七月二十四日から九月二十一日までの五十五

日間説法が行われたが、その内三十七回分聴講することができた。十八回も聴講を怠ったのは、残念なことであった。一部でも聴講しなかったのは、不信心だと言うべきであろうか。

宮家の人々の聴講回数

椎野寺主は二十四回、東御方は三十九回、廊御方は三十一回、上臈は九回、二条殿は十三回、田向三位は四十二回、重有朝臣は五十二回、長資朝臣は三十五回、慶寿丸は五回、冷泉正永は一度だけ聴講したことになる。他の人々については記すに及ばない。

各人の聴講の回数を知るために、毎日、参詣している人の名前を記してきたのである。すこぶる無用で、つまらない記録だ。ただ仏法を聞いて仏道に入る縁を結ぶために記したのである。

二十二日、晴。学問僧の月庭がお帰りになった。月庭はすぐに宇治でまた法華経の説法をするそうだ。宇治の政所が説法を希望しているらしい。

法安寺の住職が来た。このところの事を静かに話していった。

二十三日、晴。用健がいらっしやって、静かに話をした。長資朝臣が京へ出かけて、朝廷の小番を勤めに行った。

室町殿の病気はすつきりとは治っておらず、時々発作が起こるそうだ。食事もし上がらず、身体の自由も利かないらしい。

今日もまた狐憑きの僧二人が逮捕されたそうだ。この僧の名前は聞いていない。

二十五日、晴。毎月恒例の連歌会を生島明盛と行光の二人が当番として準備してくれた。いつものように一献の酒宴を行った。参加者は椎野寺主以下いつもの面々である。

二十六日、晴。指月庵へ行った。用健としばらく雑談をした。

備前国鳥取荘別納仁保村

二十七日、雨が降った。綾小路信俊前参議から書状が来た。備前国鳥取荘のうち別納の仁保村を、後小松上皇様より御恩地として一昨日いただいたそうだ。「この仁保村は、長講堂領として伏見宮家が管理していた時、宮家から御恩地としていただいて支配していた領地でした。宮家の領地が一変した（※）後は、仁保村の領主は別の者になりました。今回、かつてのこの由緒を上皇様へ嘆き申し上げたら、このように再度、仁保村の領主にしていただきました」ということだった。ただし仁保村を綾小路に下さったのは、病氣見舞のためだと、上皇様は仰ったそうだ。四辻季保朝臣が今回の手続きをしたそうだ。当方としても、まずもって一安心した。めでたいことである。

※「宮家の領地が一変した」…応永五年（一三九八）に後小松天皇が伏見宮家領の多くを没収した件をさす。

二十八日、晴。いつものように風呂に入った。さて御香宮や権現などの猿楽が今夜執り行われるらしい。

また朝廷の内侍所御神楽も、今夜行われる。綾小路信俊前参議も参列するそうだ。

京都の四条坊門あたりの街場が火事になったそうだ。二十九日、晴。今日で九月も終わりだ。名残惜しい。急に連歌を行うことにした。一献の酒宴を宮家の男どもが主催したのには、何か訳があるようだ。即成院善基が連歌の事務を執った。参加者は椎野寺主以下、いつもの面々である。夜に入って、百韻が終わった。

主以下、いつもの面々である。夜に入って、百韻が終わった。

孟冬朔（十月一日）、空は晴れた。「おめでたいことであり、とても幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものように月初めのお祝いをした。

三日、晴。世尊寺行豊朝臣が来たが、すぐに出ていった。

四日、晴。蔵光庵の紅葉を見て回った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣を連れて行った。紅葉はまだ盛りではなかった。住職は留守だったが、老僧の梵隆と出会った。しばらくして宮家に帰った。椎野寺主は自分の寺に戻った。今夜はいつものように亥子餅を食べた。

五日、晴れていたが、夜に雨が降った。伏見荘の名主が訴訟する事があって、酒樽などを献上してきた。

七日、曇。即成院主が酒一献分を持参してきた。去年、脚気を患ってから以降、初めて宮家に来た。善基もお供してきた。一献の酒宴を準備してくれた。宮家の女性たちと田向三位以下が酒宴に参加した。聞くとところによると、京都内野での御経の法会が昨日から始まったそうだと。

今出川公行の風邪は回復基調

九日、晴。今出川家から書状が来た。「今出川公行前左大臣は先月十日よりひどい風邪をひいていましたが、少し加減が良くなってきました。ただ全快というわけではなく、横になっただけです」ということだった。発病してから一向に噂を聞かなかったので、特にお見舞いもしていなかった。これは、私の本来の気持ちではない。

後小松上皇の二宮が勸修寺経興の養い君となる

さて聞くところによると、後小松上皇の次男で、称光天皇陛下の

弟君にあたる二宮様が、来たる十一日に勸修寺家へ引越しなさるそうだと。勸修寺経興朝臣の主君として二宮様を養うことになり、勸修寺家へ引越しするのだという。これは室町殿のお取り計らいだそうだと。これによって、後小松上皇様の二宮様に対するご不快な思いも弱まり、仲直りされるのではないかとのことである。このことで、勸修寺経興は忙しくなり、とても大慌てとなっているそうだと。これにより、経興が事務取扱をしている播磨国国衙領の経営にいつそう手が回らなくなるのではないかと、いろいろととても怖れている。

十日、晴。室町殿のご病気は良くなってきたが、いまだ煩わしいご病態だそうだと。狐憑の者共、権大夫高階俊経朝臣・医師の高間・陰陽師の定棟朝臣はそれぞれ四国辺りの配所に流されたそうだと。後に聞いたところによると、薬師の高間は配所に連行されていく途中で殺されたそうだと。

今出川実富大納言から手紙が来た。紅葉の枝を付けた、和歌二首を書いた懐紙を送ってきた。すぐに返歌を詠んで送った。

紅葉狩り

十一日、晴。紅葉が盛んなので、退蔵庵・蔵光庵を見て回った。当年の紅葉は、例年以上に色が濃やかである。近年のうちで特に素晴らしく、鮮やかな色合いをととても楽しんだ。

指月庵に寄り、帰り道に即成院へ行った。小さな酒樽を取り寄せて、少々酒盛りをした。夜になって、月に導かれて帰った。田向三位・重有・長資ら朝臣・慶寿丸・寿蔵主を連れて行った。

聞くところによると、今夜、二宮様は勸修寺家へお引越しされ

たそうだ。

十二日、晴。風呂に入つて、髪を洗つた。明日からいろいろと神事があるからである。

御香宮に三日連続で参詣する

十三日、晴。御香宮へお参りした。三日間参詣しようと思う。お願い事があるからだ。

さて来月、石清水八幡宮へ参詣しようと考えている。その時奉納するために、一字三札の般若心経を今日、書写し始めた。この三日間のうちに書写し終えようと思つている。願書を一紙に認めてみた。ただ、まだ草案である。

貞成、親王宣下を立願する

十四日、朝、雨が降つた。御香宮へお参りした。

さて綾小路信俊前参議から書状が来た。私が親王になることを望むべきであるという、綾小路の意見を記した書状である。

ただいま石清水八幡宮にお願いしようと思つていることの一つが、この件に関してなのである。御香宮への三日間の祈願の最中に、この件に関する意見を記した書状が届いたわけである。この事はすべて神慮によるものであらう。

この願が成就することを示す、めでたい兆しが現れたことに、とても喜んでいる。綾小路とはこの件に関して何も相談していなかったのに、ただ今、このように考えて意見を言ってきたのは、まさしく神様の頼もしい思し召しと言えよう。とてもめでたいことだ。

十五日、時々、時雨が降つた。御香宮へ参詣した。三日間無事に祈願し終えたので、願いが叶うのはもちろんのことである。

一字三札の般若心経も本日、書写し終えた。願書の草案も同じく書き終えた。いずれも石清水八幡宮に参詣した時に奉納するつもりである。

御湯殿の上で酒を飲む

十六日、晴。御湯殿の上（※）で酒を飲んだ。重有朝臣が準備してくれたのである。今夜はいつものように亥子餅を食べた。

※御湯殿の上（おゆどののうえ）：御湯殿に奉仕する女官の詰め所。十七日、晴。伏見御所旧跡に行つた。庭用の立石が必要なのだが、一つも無かつた。全部、退蔵庵に取られてしまったのである。残念な事だ。しばらくして帰つた。御湯殿の上で酒を飲んだ。今回は長資朝臣が準備してくれた。

十八日、晴。廊御方の部屋に行き、一献の酒宴をした。田向三位以下も参加した。この酒宴は小川禅啓が用意したものである。

室町殿の病氣は次第に回復しているようだ。魚をお食べになつたという。それで諸大名がおいしい物を献上しているという。室町殿はこの春からずつと身を浄め続けていた。それが最近ようやく通常の食生活にお戻りになつたそうだ。

十九日、晴。学問僧竜山の法華経講義は、今夜が最終日だそうだ。田向家や庭田家の者たちは竜山に帰依しており、毎晩、聴きに行つたようだ。大勢の聴衆が群集したらしい。

初冬の雪

二十二日、冷たい嵐が吹き荒れ、吹雪もあつた。初冬の雪は珍しいことである。ただし雪は積もらなかった。御湯殿の上で酒を飲んだ。妻の二条が酒の準備をしてくれた。重有朝臣・長資朝臣も一緒に飲

んだ。

二十三日、晴。今夜、高辻万里小路で二町あまり火事になったそう。

長資朝臣が京都へ出かけた。朝廷の小番に出仕するためである。

二十四日、晴。長資朝臣が帰ってきて、世間話を話してくれた。室町殿の病気は治ったといっても、まだ以前と同様の体調不良らしい。

御祈祷をしても状況は変わらないそう。七仏薬師法や泰山府君祭などが行われたそう。

足利義満、近習の日野有光を追い出す

院執権の日野有光中納言が室町殿の病氣療養中に室町御所に出仕していたそう。それで、有光は室町殿の近習のうちに数えられている。

ところが有光は室町殿の使者として上皇様のご機嫌を損ねるような事を言ったらしい。そのため、室町殿は上皇様へ毘沙門堂僧正をお許しになられるように有光を通して申し出たが、ご機嫌が悪い上皇様はお許しにならなかった。そのために、使者である有光は室町殿のご命令に背いたことになってしまった。それで、翌日、有光は室町御所へ行ったところ、追い出されたそう。「有光は私に仕えなくていい」と室町殿は仰ったそう。

二十五日、晴。毎月恒例の連歌会である。綾小路信俊前参議がいつものように当番として連歌会の準備をしてくれた。参加者はいつもの面々である。

夜に京都の方で火事があったらしい。焼けた場所は知らない。

二十六日、朝、雨が降った。洪蔭蔵主がやって来た。去年以来、ずっといらっしやらなかった。どうしているのかと思っていたところ、

やって来たので、うれしかった。お土産の品で、少し酒を飲んだ。

琵琶法師の椿一檢校

今夜、大光明寺の塔頭（たっちゅう）で、平家語りがあった。椿一檢校が来たそう。寿蔵主が酒宴を用意した。田向三位以下、聴衆が大勢集まったという。

二十七日、晴。夜には雷が鳴って、雨が降った。風呂に入った。特別なことはなかった。そういえば、昼に地鳴りがしたが、何だったのであろうか。

二十八日、晴。御湯殿の上で薪を焼く会をした。順番にお粥を準備する会を廊御方が始めた。用健や洪蔭蔵主がやって来た。一献の酒宴をしている際に、椿一が平家物語を語ってくれた。感動して涙がこぼれた。素晴らしい芸であった。女性ではその他に芝殿、そして田向三位・重有朝臣・長資朝臣・寿蔵主・具侍者らが酒宴に参加した。

その後また、夜に大光明寺の塔頭で平家語りを聞く会があったそう。これは、昨晚、寿蔵主が用意してくれた酒宴に対するお礼として、面々が企画したものだそう。

今夜は亥子餅を食べた。京都辺りでまた火事があったらしい。

二十九日、晴。早朝に軽食を食べた。用健のご指揮により寿蔵主が軽食の準備をしてくれた。洪蔭蔵主がただ今、嵯峨のお寺に帰るといいうので、急いで軽食を出したのである。軽食を食べてからすぐに、洪蔭蔵主はお帰りになった。

椿一檢校が平家物語を語った。芝殿・田向三位・重有・長資ら朝臣・寿蔵主・具侍者・稚児の梵柁らも一緒に平家語りを聞いた。

聞くところによると、昨日の火事は吉田神社神主の吉田兼富兄弟の屋敷が焼けたものだったそうだ。また昨晩は細川満元前管領の家臣である安富兄弟の屋敷も焼けたという。このところ、火事が連続している。怖いことだ。

三十日、晴。聞くところによると、室町殿の妻である日野栄子殿も病氣だそう。世間で流行している風邪だという。風邪にかかる人が相次いでいて、驚くばかりだ。

また聞いたところによると、前新内侍の母親も同じ病氣にかかり、今朝他界したそう。この母親は芝殿の姉妹なので、芝殿は急いで京都へ出ていった。前内侍の娘も既に亡くなって、まだその片付けも済んでいないのに、今度は母親と離別することになった。不運の至りであり、どうしようもないことである。

この母親を杉庭田資子さんが召し使っていた。永年杉殿にお仕えしており、古くからのよしみがあった。かわいそうなことである。さて用健が前日いらっしやった時、「和歌の才能はないが、寺住みの暇のあまりに、少し詠んでみました。和歌の善し悪しいかがなものでしょうか」とお聞きになった。

月を指し 指を止めける 人もがな

我が山住みの 心知らせん

月見よと 結び置かれし 柴の庵（いお）

心曇らぬ 友ぞ少なき

すばらしいお歌なので、今日、返歌を詠んだ。その言葉は

感指月呈金玉 不堪褒美綴瓦礫奉和 江南隠士（※） 九拜

山住みの 深き心は 月を指す

教への外を 悟るとぞ知る

伏見山 月指す庵（いお）を 慕い来て

住むは昔の 友や恋しき

※江南隠士（こうなんいんし）…貞成のこと。

霜月朔日（十一月一日）、空は晴れて、夜、雨が降った。「ことごとくに、たいへん幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものように月初めのお祝いをした。

夜に世尊寺行豊朝臣が来て、世間話をしてくれた。七仏薬師法の法会が今朝、最終日を迎えたそう。参列した公卿は三条公光大納言・今出川公富中納言以下、参議が四人だという。大勢が参列したそう。導師の青蓮院主が岡崎から経文を唱えながら歩いて法会の会場である青蓮院まで来る（※）など、厳かな様子だったそう。

足利義持の広橋兼宣・日野有光に対する処遇

広橋兼宣は、室町殿から不快に思われているので、今回の参列者には指名されなかった。それで、法会には出仕しなかったそう。広橋は朝廷や上皇御所への御使者の役も勤めず、自宅で謹慎しているという。

日野有光大納言（※）は先日、御所を出てから以後（※）、自宅謹慎していた。しかし今日になってお許しが出て、法会に参列したそう。ただし日野は室町殿の御前には顔を出さなかったという。去る二十八日の御亥子の行事の際に（※）、室町殿御所へ近侍している公卿や侍臣が集まった。その時に室町殿は日野に対して「私に仕えてはならない」と仰ったので、日野は御所から出て行ったそう。それで検非違使別当である勧修寺経興がただ一人、七仏薬師法

法会の事務取扱者として勤務したそうだが、このように室町殿の人事統制がとてども厳しいので、諸人は困っているという。

室町殿のご病気はこのところ快方に向かつており、今では特に悪化することもないだろうとのことだった。奥様の日野栄子殿の病気も少しずつ快方に向かつているようだ。称光天皇陛下の嵯峨行幸も延期となり、今では行幸そのものもとりやめになるだろうとのことだった。

以上のようにいろいろなことを世尊寺行豊は話してくれた。今夜は宮家に泊まるという。

琵琶法師の椿一検校

琵琶法師の椿一検校が来た。台所で平家物語を語ってくれた。田向三位以下が薪を焼く会を開いた。夜遅くまで平家語りは続いた。

※「導師の青蓮院主が岡崎から経文を唱えながら歩いて法会の会場である青蓮院まで来る」：原文は「阿闍梨青蓮院岡崎行道参向」である。図書寮叢刊では「山岡崎」と読んでいるが「岡」は岡の異体字なので、岡崎とした。岡崎は、青蓮院のある粟田口に隣接する地域である。七仏薬師法では行道（経文を唱えながら歩くこと）を伴うが、法会の場以外で行道するのは珍しいようである（鳥谷部輝彦「七仏薬師法における奏楽」、『東京芸術大学音楽学部紀要』三五号、二〇〇九年）

※「日野有光大納言」：『公卿補任』応永二十七年条によると、日野有光は権中納言。

※「御所を出てから以後」：原文では「御退出以後」とあるが、日野有光に対して「御退出」と敬語を使うとは考えにくい。「御所退出」

の「所」一字が書き落とされたものと判断した。

※「二十八日の御亥子の行事の際に」：十月二十四日条にはその翌日の二十五日に足利義持は日野有光を御所から追い出したと記している。このあたりの事実認識には、ずれがある。

二日、雨が降った。今日は石清水八幡宮卯日御神楽の日である。神事が行われたそうだが。

小川禅啓は守護山名家の奉公人

さて小川禅啓に対して、この一日から十五日に至るまで石清水八幡宮を警護するよう、山名時熙右衛門佐入道が命じたそうだが。この忙しい時分に迷惑な話である。しかし、「警護に行きます」と禅啓は返事をしたそうだが。この事は、近年、禅啓が山名の奉公人として名を連ねていることによるものである。既に山名に仕える者である以上、辞退する余地はないであろう。

伏見荘村人ら、守護家と主従関係を結ぶ

およそ伏見荘の村人で、禅啓は山名に、三木善理は畠山に、それぞれ仕える者として名を連ねている。これは万一の事があつた時、守護に力を貸してもらうため、私的に主従関係を結んでいるのである。伏見荘の領主としては見過ごすことができない事態である。今後、このような主従関係の契約は堅く禁止するつもりである。

宮家の御湯殿の上でちよつとした酒宴を治仁王の妻であつた上臈が準備してくれた。これは先日、重有朝臣が準備してくれた酒宴に続くものである。今後、宮家の者が当番を組んでこのような酒宴を準備することとなった。

五日、晴。御湯殿の上の酒宴を、当番の東御方が準備なさつた。

七日、晴。順番に粥を用意して振る舞う会をいつものように東御方が用意してくれた。場所は御湯殿の上で、薪も燃やした。田向三位以下が参加した。

足利義持の御湯始めの儀式

さて今日は、室町殿の御湯始めの儀式だそう。日時は陰陽師が十四日が吉日だと占ったという。しかし時期的にあまりにも遅いので、十四日以前はどうかと再度お尋ねになった。陰陽師の賀茂在方朝臣が言うには「七日は長病日です。八日は最上の日ではありませんが、沐浴するには適した日です。八日に御湯始めをなさったらいかがでしょうか」とのことだった。

医師の仕仏三位房

さらに室町殿は医師の仕仏三位房にお尋ねになった。三位房は「七日が最上の吉日です」と言った。それで室町殿は、陰陽師の占い結果を破棄なさって、医師の意見を採用なさったそう。

医師の三位房にいろいろとご褒美の品をお与えになったそう。室町殿の常御所の飾りにしていた鎧甲、屏風の絵、中国からの輸入品、ご着用の小袖や宿直用の装束など七着、それに数多くの重宝などを三位房にお与えになったそう。

御湯始めのお祝いに、公家や武家で室町殿に近侍する人々は、馬や太刀を献上したそう。今出川家も馬一頭を献上したという。

同じ医師でありながら、高間は死罪に処された。それにひきかえ、三位房はご褒美に預かった。すべての事柄に定まりはなく、人の世には憂いや喜びが様々に訪れる。こうした無常に今更ながら驚かされたことである。

八日、晴。御湯殿の上での小酒宴を当番の廊御方が用意して下さった。さて小川禅啓が石清水八幡宮から戻ってきた。当番の警護役は十五日までなのだが、代わりの者を置いてひとまず戻ってきましたと言っていた。

足利義持に好物のミカンを贈る

九日、晴。薄皮ミカンを二籠、室町殿へ贈った。田向三位が使者として持参した。

ミカンは室町殿の好物だそう。それにミカンは病氣療養中の病人が食べたがる物であるから、大勢の人たちが室町殿にミカンを献上した。そのために、今年はミカンが入手しにくくなっているそう。大勢の人々がミカンを求めて走り回っているらしい。

蔵光庵にミカンの木があるのでミカンがほしいと申し入れたところ、ミカンを百個献上してきた。しかしそれでは足りない、薄皮ミカンも加えて室町殿へお贈りした次第である。

後小松上皇へもミカンを贈る

十日、晴。後小松上皇様へミカンを二籠お贈りした。籠には完熟ミカン（※）と薄皮ミカンを混ぜた。いつものように冷泉永基朝臣を通してお贈りした。

田向三位が帰ってきた。昨日、室町殿の御所へ行った。しかし取り次ぎ役の裏松がいなかった。高倉永藤朝臣が居たけれども、彼は室町殿に呼ばれた時しか、御前には行かないそう。それで取り次ぎ役がいなくて困り果て、数時間待っていたところ、伊勢貞長因幡守が通りかかった。それでこの貞長にミカン二籠を持って来たことを申し入れた。それで取り次いでもらい、ミカンを室町殿のお目に

かける事ができた。

室町殿のご返事としては、「思いがけずお贈り下さり、うれしく存じます。特に好物なので、よくよく味わっていただきます」とのことだった。またさらに「病気は回復しましたが、なお気分はすぐれません。なんとかスッキリと回復したら、重ねてお礼を申し上げます」とのお返事だった。詳しいお返事をいただいて、うれしかった。

上皇様からのお返事は、夜になってから届いた。上皇様からの直々のお返事だという。詳しくお返事をいただいて、これもうれしかった。

※「完熟ミカン」：原文には「熟子」とある。

十一日、晴。御湯殿の上での小さな酒宴を当番の私が準備した。宮家の女性たちや重有・長資ら朝臣が参加した。当番は一巡し終わった。

子の日の大黒天法楽

今日は子の日だ。大黒天神にお供えをして、林歌を奉納した。この林歌の演奏には長資朝臣も参加した。

十日ごとの雅楽練習日なので、平調の曲を四〜五つほど練習した。この一〜二ヶ月、十日ごとの雅楽練習をしていなかった。長資朝臣は雅楽に心惹かれていないので、練習に参加しなかった。それで、私も怠けてしまった。

さて聞くところによると、室町殿のご病気は全快したそうだ。それで夕方から石清水八幡宮へ神馬十五頭を引いていき、夜になって奉納したそうだ。

後で聞いたことだが、三善興衡朝臣の老母が今日他界したそうだ。

土倉盗人

十二日、晴。聞くところによると、今朝、四条富小路の土倉に入道姿の盗人一人が押し入ったそうだ。この土倉は、伏見荘の土倉宝泉の親類だそうだ。この盗人は土倉内に走り入り、内側から戸を閉めて立て籠もったという。そして、盗人は土倉内から「私は貧乏のあまり、土倉に入った。土倉の主人と対面して言いたいことがある」と言ってきた。主人は恐怖のあまり、対面できなかった。別人を通して問答したところ、所詮は財宝が欲しいということだった。それで「ともかく出てきなさい。そうしたら銭の百貫文や二百貫文ぐらいは与えよう」と何度も説得した。

また盗人は「土倉を出たとしてもよもや無事では居られまい。いっそのこと、放火して焼け死にたい」と言ってきた。それですぐに火打ち石を取り出して、土倉内の小袖や帷子などに火を付けた。

その内に大騒動となって、侍所の役人が飛んできた。侍所長官補佐の三方範忠山城入道の手の者たちが土倉の戸を打ち破り、三人が中に入ろうとした。ところが盗人は太刀と刀を入口に交差させて植え込んでおり、容易には入れない。

そこでまず三方の若い従者でしぶきという者が一人で交差した太刀・刀を飛び越えて土倉中に入ったところ、額と前髪(※)を斬られてしまった。それでもしぶきが盗人と組み合っていたので、他の者たちも続いて中に入ったが、また盗人に斬られてしまった。それで長官補佐の従者たち三人が怪我をした。しかし遂に盗人を討ち取ったそうだ。

火を付けた小袖など三百点あまりが焼け焦げた。騒動の最中であ

り、しかたのないことだったという。この土倉業者は土倉を二つ管理していたそうだ。

※「額と前髪」…原文では「穀髪」とある。

十六日、朝に小雨が降った。聞くところによると、三方の若い従者であるしぶきは重傷だったので、死んでしまったそうだ。

十八日、晴。父・大通院の御仏事を始めた。塔頭御寮恵芳・玄経・寿藏主・善基・稚児の梵祐らが参列した。

さて学問僧月庭の宇治での説法を聞くために、田向三位は出かけていった。他所まで説法を聴講しに行くとは、信仰心浅からぬものといえよう。小川禅啓も聴きに行ったそうだ。

十九日、晴。今夜より読経の法事を一昼夜繰り上げて行うことにした。読経したのは、いつものように宮家の男女と山田香雲庵の真幸である。お粥を当番である長資朝臣がいつものように準備した。

二十日、晴。御仏事で、いつものように一時間、時間をかけて書写した法華経を読むなどした。即成院主梵基・惣得庵主・同庵御寮理勝・理真らも参列した。その他は、一昨日来の参列者である。いつものように軽食を食べた。軽食は寿藏主が手配してくれた。

昼に大光明寺へ参詣した。東御方・廊御方・田向三位・重有・長資ら朝臣が同行した。玄経・真幸も同じく参詣した。寺の門前で椎野寺主と会った。椎野寺主も焼香しに来たとのことだった。その後、用健もいらっしやった。

木幡との境界を示す書類について、大光明寺から照会があった。田向三位を寺に行かせて、長老に詳しく説明させた。

二十一日、晴。お粥を当番の寿藏主が用意してくれた。精進落として

魚料理などを食べ、いろいろと賑わった。椎野寺主・田向三位以下が精進落として参加した。

二十二日、晴。用健がいらっしやった。その後、田向家へお入りになった。そしてまた椎野寺主も田向家に入っていた。私にも来るように頼りに田向三位が言うので、私も田向家へ行った。少し酒を飲んだ。しばらくして宮家へ帰った。

今夜、京都の六角町あたりで火事があったそうだ。

学問僧月庭の謝礼

二十四日、晴。いつものように風呂に入った。

さて学問僧の月庭が雑用係の弟子を派遣してきた。「一昨日、宇治から淀へ戻りました。宇治での説法は無事終了しました。これも、ご懇意になさっている知恩院僧正に宮様が推薦状を書いてくださったおかげです。とてもうれしく存じます」と申された。そして宇治茶十袋を献上してきた。思いがけない芳志で、うれしかった。学問僧は宇治に帰った。月庭の庵は瑞芳庵だそうだ。

二十七日、晴。行藏庵留守居の僧である真藏主と洪珠侍者が軽食分の銭を持参してきた。これは行藏庵の留守居役に任命（※）してくれたいお礼だそうだ。真藏主と対面して、すぐに出ていった。寿藏主・洪珠侍者はそのまま残って、一献の酒宴をした。酒宴には田向三位以下も参加した。

※「行藏庵の留守居役に任命」…原文では「行藏坊主開」とある。

二十八日、雨が降った。毎月恒例の連歌会、今月の幹事は椎野寺主である。一献の酒宴を特別に準備してくれた。田向三位・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・善基・行光・禅啓らが連歌会に参加した。午

後九時に百韻を詠み終わった。

その後また台所でも連歌会があったそうだ。この連歌会は宮家の男どもが開いたものだという。

十二月一日、晴。「良い兆しがあり、すべてのことに満足して、たいへん幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものように月初めのお祝いをした。

広時、屋敷を新築する

さて今日から広時の新築屋敷の建設工事が始まったそうだ。宝殿院の敷地内に建てるという。この御所の西隣である。

四日、雨が降った。来たる七日、大臣任命の式典が行われるそうだ。

大炊御門宗氏大納言が内大臣になるという。

宗氏は、近衛大将を兼任しないで、ただの大納言から直接、大臣になった。このことは、近衛大将兼任のやりくりが付かない(※)ので、朝廷としては苦肉の策としてこのように取りはからったようだ。大炊御門家としては無念なことであろう。検非違使別当の勧修寺経興朝臣が大臣任命の取り次ぎ役をするそうだ。

来たる十五日、石清水八幡宮臨時御神楽が行われるという。綾小路信俊前参議がこの神楽に出仕するそうだ。そのため、朝廷からお見舞い金として錢百貫文が綾小路に与えられたそうだ。

※「近衛大将兼任のやりくりが付かない」…この時点で三条公光内大臣が左大将を兼任している(十二月五日に右大臣に転任すると同時に左大将を辞め右大将を兼任)。また十二月に右大臣を辞任するまで西園寺実永が右大将を兼任していたという事情がある(『公卿補任』応永二十七年条)。

六日、晴。お粥を当番の田向三位がいつものように準備してくれた。

七日、晴。今夜、大臣任命の式典が行われた。昇進したのは、右大臣が三条公光、内大臣が大炊御門宗氏、権大納言が土御門資家と同じく今出川公富、権中納言が京極実光、参議が西園寺公名(※)らである。

公富卿は上位者数人を追い越して昇進しており、特に気持ちがいのことだろう。めでたいことである。

内本善祐の乱行

さて今日、御香宮で般若心経三千巻を祈祷するため、村人たちが社頭でお経を読んでいた。その時、即成院善基と御所侍内本善祐が口論となった。それで善祐が刀を抜いて、善基を突き刺そうとした。その座中にいた人々が仲に入って宥めた。それでも善祐は収まらず、杖で善基を打ち叩いた。

とんでもない所行である。このことを田向三位が報告してきたので、善祐の罪科は逃れがたいものといえよう。善祐の名主職などを没収して、伏見荘から追放すべく、命令書をもって処罰しなさいと田向三位に命じた。

善基は辱めを受けたので、寺を出たいと言い出した。とりあえず、善基を慰留した。たとえ善基に問題があったとしても、相手が僧侶であるのだから、宥免すべきである。それに神社の社頭という場であり、また祈祷の最中のことである。そのような状況で、このような乱暴を働くと、酒に酔っての所行であろうか。今後、このような行いは厳しく処罰しよう。

※「西園寺公名」…原文では西園寺公名の後に「兼」と記されている。

西園寺実兼の筆跡

八日、雨が降った。今出川公富が大納言に昇進したことに關して、お祝いの手紙を送った。また後西園寺実兼太政大臣入道の和歌百首が書かれた懐紙を今出川公富新大納言に送った。実兼の筆跡が必要だと公富が言っていたので、選り出して送ったのである。

室町殿が来た十四日に伊勢神宮へお参りする。それにお供する人々は晴れがましいことだという。今回、室町殿の病気が回復して、病氣平癒の立願が叶ったことに対するお札参りだそうだ。

十一日、晴。風呂に入った。冷泉正永が来た。

さて室町殿の伊勢参宮だが、寒い時期なので諸大名がお引き留めして、来年春まで延期となったそうだ。そのかわり御台所の日野榮子殿が伊勢神宮に代参するらしい。石清水八幡宮御神楽も延期となったという。

十二日、晴。西大路隆富が来た。これは今日、毎月恒例の連歌会の幹事役を隆富が勤めるためである。

また知恩院隆秀僧正が小一献の酒を持参して来た。一座の連歌会が始まるので、隆秀僧正にも参加してもらい、一〜二句付けてもらった。隆秀の連歌の技は問題なく、すばらしい詠み手といえようか。いつものように一献の酒宴があった。ただしいつもより多少丁寧な幹事の隆富が取りはからってくれた。夕方になって、僧正は帰っていった。夜に入って、連歌百韻が終わった。連歌会の参加者は、椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・隆秀僧正・冷泉正永・即成院善基・生島明盛・行光・小川禅啓らである。

今年の毎月恒例の連歌会も無事すべての会を終了した。喜ばしい

ことである。

住心院豪融僧正の死

【頭書】（日記の上方の隙間に書き加えた記事）住心院豪融僧正が今日亡くなったそうだ。豪融僧正は以前から宮家に仕えてくれており、とてもかわいそうなことであった。

西大路隆富の笙

十三日、晴。隆富はこの一〜二年の間、笙を吹いている。豊原家秋の弟子になっているそうだ。いまだ聞いていないので、隆富に笙を吹かせた。五常楽急・扶南・鶏徳の三曲を吹いた。初心者ながら、問題のない才能であろう。椎野寺主が寺へ帰った。隆富と正永も帰っていった。

さて近江国山前荘について、後小松上皇様のご命令があったそうだ。冷泉永基がその件に關して詳しい報告をしてきた。明春あらためて後小松上皇様へ申し入れるつもりである。

星や光り物の怪異

ところで、昨夜、星が地に落ちた。陰陽師は国の主が謹慎なさるべきことだと占ったそうだ。また昨夜は、光る物体が北から南へ飛んでいった。伏見荘あたりに住んでいる人がこれを見たそうだ。もしかしたら、これもまた星が地に落ちたものであろうか。はっきりとは分からない。

また以前に、月の中に星が入っていったことがあった。月の外側の輪の中に星が入ったそうだ。何人もの人が目撃している。これは月がありながら夜が明けてくる時分のことらしい。この件は先月のことであろうか。これもはっきりしない。この事について、陰陽師

は古い結果を朝廷に申告していない。とても不吉な出来事の前触れらしい。

十五日、晴、夜に雨が降った。薪を焼く会をいつものように当番の重有朝臣が準備した。

十六日、晴。安楽光院の長老が来た。年末の礼だという。対面して、少し雑談した。しばらくして帰っていった。

北野天満宮奉納の和歌

さて四条隆盛朝臣が北野天満宮に奉納する和歌を集めているので、二首詠んで渡した。重賢という仮名で和歌を書いた。

社頭古

跡垂れし 昔思ふも久方の 天満神は 幾代経ぬらん

寄筏恋

逢う事は 浅瀬に淀む筏師の 樽松(くれまつ) 程も

濡るる袖かな

重有朝臣・長資朝臣・正永も各々和歌を詠んだ。題は各々別である。

十七日、雨が降った。陰陽師の賀茂在方朝臣が新しい暦や占いの書を献上してきた。

十八日、昨夜、寒い嵐が吹いた。明け方に雪が十二センチから十五センチほど積もった。十月に降った初雪は霜が降ったようだった。その後、今日まで雪はずっと降らなかった。珍しくて、少なからず趣があつた。いつものように廊御方と田向三位が一献の雪見酒を用意してくれた。

老尼の酔狂乱舞はいつものこと

その後、廊御方のお部屋に向かった。こちらから押しかけたので、酒を持参した。廊御方も面白がって、酒盛りとなった。禪啓・行光・広時・有善らも、この酒盛りに参加した。彼らはそれぞれ飲み継ぐための酒を用意していた。乱舞になった。老いた尼が酔狂のあまり乱舞をするのは、いつものことである。面白かった。皆とても深く酔った。

十九日、晴。夜に音楽会をした。採桑老・蘇合急・白柱・輪台・青海波・竹林楽・越殿楽・千秋楽と朗詠二首をした。その後、長資朝臣も参加して、万秋楽と一緒に演奏した。以上の曲を妙音天に奉納した。

十日に一度の雅楽練習を秋以降、怠けていた。長資朝臣は音楽に身が入らないので、練習に参加しなかった。それでずっと怠けてしまった。長資朝臣は稽古をするのも退屈に思っているようだ。

二十日、薄雪が降った。いつものように身を浄めてお経を読んだ。大光明寺へお参りして焼香した。東御方・廊御方・田向三位・重有・長資ら朝臣を連れて行った。帰り道、東御方と廊御方は惣得庵に立ち寄って、すぐに帰ってきた。

さて百日の稽古は今日が最終日である。琵琶や和歌の練習が無事に終わり、我ながら喜ばしいことである。詠んだ和歌は今出川家の歌会に送った。永年、このように今出川家の人たちと一緒に和歌を詠んできた。それを怠つたことは今まで一度もない。このような些細な事でも、何の障害もなく続けられてきたことは、喜ばしいことである。

内裏で犬の死穢が発生

二十一日、晴。綾小路信俊前参議が年末のお礼を言いに来た。今夜は内侍所御神楽をするはずだったそうだが、ところが、内裏で犬の死穢が発生したので、延期になったという。

綾小路が小一献の酒を持参して来たので、飲むことになった。その後、音楽会をした。万歳楽・三台破急・甘州・五常楽急・太平洋急・朗詠・林歌などをした。綾小路前参議と長資朝臣が参加した。

この音楽会を百日の雅楽練習の納めの会とした。

二十二日、晴。綾小路前参議が帰っていった。

太子堂の祈祷報告書

太子堂（速成就院）が祈祷した内容の報告書を送ってきた。筑前国赤馬荘が寄進され、伏見宮家のために祈祷を始めたので、その報告書を献上したのだという。太子堂の長老は摂津国多田院に住んでいらっしやる。その留守居役の寺僧である宣舜がこの報告書を持参してきた。

二十四日、晴。朝に小さな地震があった。今日は節分である。夜に雨が降った。

さて後小松上皇様から八朔贈答のお返しが下された。冷泉永基朝臣が取り次ぎ、冷泉正永が持って来てくれた。練貫の絹織物三重・紅色の薄手の和紙に包まれた沈香一包み・引合紙十帖をいただいた。とてもめでたいことである。年末の慌ただしい時分にもかかわらず、お忘れにならずにお送り下さったのが、特にうれしく、また

特別な味わいを添えている。当方のお返事をもって、正永は出ていった。正永には今回の褒美として服を一着与えた。

若宮の御髪置

さて今日は我が息子の髪を伸ばし始める儀式の日である。陰陽師の賀茂在方朝臣が今日の午前十一時が良い日時だと占って来た。ところが準備に手間取り、午後五時ようやくこの儀式を始めた。田向三位源朝臣がこの儀式に奉仕した。先例にこだわることはやめた。まったく内々の儀式だからである。その後、一献の祝宴があった。宮家の女性も皆、祝宴に参加した。それに芝殿・田向三位・重有朝臣・長資朝臣も参加した。酒宴は数献に及び、余興の音楽や歌舞などとても面白かった。参加した面々からも一献の酒が献上された。綾小路前参議・田向三位・重有朝臣・隆富・祐誉僧都、それに村人の禅啓や宝泉らがお酒を献上した。上皇様からの贈答お返しがちょうど届いた良いタイミングなので、とくにめでたいこと限らない。御服一着を若宮に進上した。妻の二条殿も同じく一着を若君に与えた。特にお祝いするためである。

重有朝臣の子息で慶寿丸の弟も、魚をはじめ食べて食べさせる儀式と髪を伸ばし始める儀式をしたそうだが、今夜、田向家でそのお祝いの儀式があった。その儀式を終えた後で、宮家御所に来たそうだが、一献の酒宴を準備してくれた。お祝い事が重なり、めでたいことだ。節分と共に二人の子どもの儀式に対してもお祝いをした次第である。

二十五日、晴。今日は立春朔日である。「良い兆しがあつて満足である。すべてのことがとても幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつもの

ように強飯でお祝いをした。宮家の女性たち・田向三位・重有・長資ら朝臣がお祝いに参加した。

二十六日、晴。いつものように煤払いのお祝いをした。陰陽師の土御門泰継朝臣が新しい暦と占いの本などを献上してきた。我が息子にも同じく献上した。名前を在守と改めた(※)。

祐僧僧都が酒一献分の錢少々を持参してきた。煤払いで慌ただしいので、少しだけ対面して、すぐに帰っていった。

田向三位が京に出ているので、室町殿への歳末のお礼を申し上げておくように清原常宗に伝えさせた。慈光寺通光三位入道が歳末のお礼状を送ってきた。彼の称号は慈光寺三位というらしい。この称号を初めて聞いたので、記録しておく。

夜、廊御方のお部屋に行き、酒を飲んだ。浅野康知が酒の準備をしたそうだ。

※「名前を在守と改めた」：誰のことだか未詳。この前に文の脱落があるか。

二十七日、晴。石清水八幡宮臨時御神楽が今日行われたそうだ。儀式の執行責任者の公卿は久我清通中納言だという。石清水八幡宮臨時御神楽に執行責任者の公卿が参列することは近來、絶えていた。しかし今回、このことを再興して、嚴重に臨時御神楽が行われたようだ。この御神楽で、綾小路信俊前参議は和琴を演奏した。拍子をとったのは、地下の楽人らしい。

町経時朝臣が来た。対面してしばらく雑談した。少しして帰っていった。

内本善祐を許す

二十八日、晴。お粥を食べる会、今日は私が当番の幹事である。特別に一献の酒宴も準備した。宮家の侍女や田向三位以下が参加した。

さて内本善祐を譴責したことについて、小川禅啓がお許し下さいと再三申し入れてきた。歳暮の時期であるので、公私ともに許すことにした。善基に対しても禅啓・広時が出向いて、善祐を許すように説得したそうだ。

二十九日、晴。風呂に入った。いつものように、年末における身の浄めである。

惣得庵御寮と明元らが来て、すぐに帰っていった。

内本善祐が許されたことに感謝して挨拶に来た。酒樽を持参してきたので、酒を飲んだ。

勸修寺経興朝臣が播磨国国衙領の特産品などをいつものように送ってきた。

土御門有清が新しい暦と占いの本などを献上してきた。古くからの誼に基づいて、丁寧な献上してきた。とても神妙である。

今夜は内裏で内侍所御神楽があるそうだ。

三十日、晴。今日で暦もすでに尽きて、巻数の軸ばかりになった。慌ただしくて忙しむばかりの一年だった。

大光明寺の長老が来たので、対面した。その他、寺庵の僧たちも来たので、各々と対面した。近年、僧たちはこの大晦日の日に挨拶に来るようになった。僧の間では昔からの仕来りというものがないのだろうか。この年末の忙しい時分に遠慮すべきではないだろうか。しかし近年はこれが良い先例になってしまった。

いつものように除夜の鐘をお祝いした。来年の春は宮家を再興させたい。すべてのことを普通に戻したいと願うのみである。
上皇様の八朔お返しの御服をいつものように東御方と廊御方へ配った。

一年中の日記、宮家内の雑事・世間のうわさ話などを詳しく記録した。後の者がこれを見ることは差し障りがある。努々、他家の者にこれを見せてはならない。

（続）

